

発掘された小田原城とその城下

—遺跡から探る地域の魅力とその活用—

神奈川県教育委員会文化遺産課
三戸 芽

はじめに

「小田原城」という言葉を聞くと、天守閣を思い浮かべる方がいると思います。また、毎年5月3日に開催している北条五代まつりに代表されるような戦国大名小田原北条氏(以下、北条氏)をイメージされる方もいるでしょう。今回の講座では、近年の発掘調査成果から見えてきた戦国時代から江戸時代の小田原城とその城下をご紹介します。

小田原城とその城下の立地

小田原市は神奈川県の西端に位置し、東南～南は相模湾に面し、三方は山に囲まれています。その中でも、小田原城とその城下は市域の西側に位置しており、箱根外輪山から東に延びる丘陵先端部に位置しています。南西に早川、北東に山王川・酒匂川が流れています。その城域は自然地形を巧みに利用しており、標高123.8mの小峯御鐘ノ台を頂点とした谷津丘陵・八幡山丘陵・天神山丘陵の三本の尾根とその麓に広がる標高10m前後の沖積低地で構成されています。現在の小田原城天守閣は、八幡山丘陵先端部に位置しています。本丸・二の丸は小田原城址公園として整備が進められており、地域の憩いの場であるとともに観光イベントが開催される中心地として活用されています。三の丸や総構などは城址公園の外に広がっており、市街地のため多くの個人住宅や商業施設などが遺跡の上に立地しています。

小田原市域には、令和6年4月末時点で281箇所の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)と3つの国指定史跡(史跡小田原城跡・史跡石垣山・史跡江戸城石垣石丁場跡(関白沢支群早川石丁場跡))があります。小田原城とその城下のうち、城址公園(本丸・二の丸の一部)と総構の一部は史跡指定されています。これまで、約600箇所で発掘調査が実施されてきました。その多くは、個人住宅の建設工事等に伴う発掘調査のため、調査面積は極めて限定的なものです。しかし、これらの発掘調査で明らかになってきた戦国時代と江戸時代の小田原城とその城下の姿を合わせてみていくと、文献や歴史史料だけではわかりづらい町の姿が明らかになっていくことでしょう。

戦国時代の小田原城とその城下

小田原城の歴史は、大森氏が城主となる15世紀にはじまります。大森氏の時代は、応永23年(1416)から15世紀末にあたり、現在の県立小田原高等学校付近に小田原城が形成された可能性が指摘されています。しかし、これまでの発掘調査では遺構・遺物がほとんどなく、考古学的には不明確な時代です。

その後、16世紀初頭以降は伊勢宗瑞(北条早雲)を始祖とする北条氏の居城となり、以後氏綱・氏康・氏政・氏直と続く「北条五代」が関東一円に勢力を及ぼす拠点として拡大・発展しました。小田原城とその城下は、戦国時代には北条氏の本城で「総構(大構)」という全長約9kmにわたる堀と土塁で囲まれていることはよく知られているかと思いますが、永禄4年(1561)には上杉謙

信、永禄12年(1569)には武田信玄の侵攻を退け、天正18年(1590)に豊臣秀吉と対峙した小田原合戦の際には中世最大規模の城郭に発展し、3ヶ月の籠城戦の末に開城します。

発掘調査では、文献からはわからない戦国時代の小田原城の姿が少しずつ明らかになってきています。二の丸では、史跡小田原城跡御用米曲輪の調査により、切石敷きの庭園や礎石建物などが見つかっています。また、城下では17世紀前葉以降とは異なる正方位の区画を意識した町割りが為されたと考えられています。

江戸時代の小田原城とその城下

「難攻不落」の城郭として名を馳せた小田原城ですが、北条氏滅亡後は徳川家康の関東転封に伴い、大久保忠世が小田原城主となり、江戸時代には譜代大名であった大久保氏・稲葉氏が城主となり、天守、櫓に城門が普請され、石垣と水堀を備えた近世城郭に改変されました。このように、小田原城は中世と近世の遺構が重層的に複合する城郭であるという特徴があります。小田原三の丸ホール建設に先立って実施された杉浦平太夫邸跡・大久保弥六郎邸跡の発掘調査は、小田原藩重臣の武家屋敷として利用された土地での大規模な発掘調査で、武家地のくらしぶりを示す様々な遺物が出土しています。一方、宝永の富士山噴火や度重なる大地震などの自然災害により、小田原城とその城下は被害を受けますが、その度に復興していきます。

その後の小田原城とその城下

明治4年(1871)廃藩置県により小田原藩が廃止され小田原県が置かれると、やがて本陣・脇本陣及び宿駅制度が廃止され、小田原城も廃城されます。江戸時代まで城下町・宿場町として賑わいを見せた小田原のまちは衰退します。しかし、明治20年鉄道の開通をきっかけに、東京から交通至便と豊かな自然環境により政財界を中心に別荘地・保養地として復興していきます。小田原城二の丸に御用邸、天神山に閑院宮別邸が建設されると、保養地・別荘地としての小田原の名声はいっそう高まっていきました。

小田原城は明治3年(1870)に廃止・解体されて以来、天守閣をもたない城でした。戦後、市民の間で天守閣の石垣を積み直す「天守閣石一積運動」によって石垣が再建されたのに続き、市制施行20周年の記念事業として天守閣の再建が決定し、昭和35年(1960)に完成しました。

発掘調査成果の活用に向けて

これまでご紹介してきたように、小田原城とその城下の姿を解き明かす資料として城絵図や文献資料のほか、発掘調査で確認した遺構・遺物があります。小田原城に限らず、発掘調査で確認された遺構の多くは、緊急発掘調査で検出されたものなので、調査終了後に現地へ赴いても埋め戻されて見ることができなくなっているものが多くあります。そこで、現在多くの自治体ではデジタル技術の導入等により発掘された遺構・遺物の活用に取り組んでいます。例えば、「おだわらデジタルミュージアム (<https://odawara-digital-museum.jp/>)」では、考古・歴史・美術・民俗・文学・自然などの貴重な地域資料をデジタル情報として、いつでも・誰でも・簡単にアクセス可能とすることを目的に令和4年3月末オープンしました。市学芸員が厳選した資料の3Dや建造物等のVRツアー、高精細写真などのほか、子ども向けコンテンツを公開しています。GOOGLE MAPに文久図を重ね合わせた地図や、出土遺物や城絵図の高精細写真が閲覧可能で、古写真も確認することができます。

戦国時代から近代までさまざまな切り口で語れる小田原城とその城下をはじめとする遺跡や文化財の活用は、自治体職員や専門家はもちろん、その地域で暮らす人/訪れる人で一緒に考えていく必要があります。

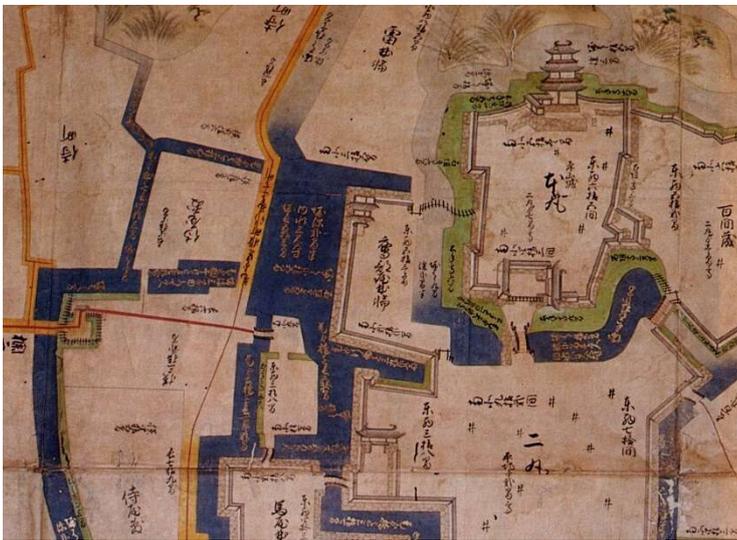
表 1 小田原城とその城下関連年表（小田原市教育委員会 2024 『小田原城三の丸 - 近世武家地とその下に広がる遺跡 - 』小田原の遺跡探訪シリーズ 19 より転載）

		和暦	西暦	事項	
中世	北条時代	14世紀		はじめて「をたはら（小田原）」の地名が登場する	
		文亀元年	1501まで	伊勢宗瑞が小田原城を支配下におく	
		永正15年	1518	氏綱が早雲より家督を継ぐ	
		大永3年	1523	氏綱、伊勢から北条に改姓する	
		天文10年	1541	氏綱没し、氏康が家督を継ぐ	
		永禄2年	1559	氏政が家督を継ぐ	
		天正8年	1580	氏直が家督を継ぐ	
	前期大久保時代	天正18年	1590	小田原合戦 北条氏が豊臣秀吉に小田原城を明け渡す 氏政と弟の氏照、自刃、氏直は高野山へ追放となる 大久保忠世が小田原城主となる	
		天正19年	1591	氏直、赦免される。一万石を与えられ、秀吉に出仕するも病没する	
		文禄3年	1594	大久保忠隣が城主となる	
		慶長5年	1600	関ヶ原の戦い	
		慶長8年	1603	徳川家康、征夷大將軍となる（江戸幕府の成立）	
	江戸時代	番城	慶長19年	1614	忠隣が改易され、小田原城は幕府管轄の番城となる
			慶長20年	1615	豊臣氏が滅亡する（大坂夏の陣）
阿部		元和5年	1619	阿部正次が藩主となる	
番城		元和9年	1623	再び番条となる 小田原城を二代將軍徳川秀忠の隠居城とする計画が立てられる	
		寛永9年	1632	稲葉正勝が藩主となる	
稲葉時		寛永10年	1633	小田原城の修築が始まる 寛永小田原大地震により修築中の城と城下に大きな被害がでる	
		延宝3年	1675	小田原城の修築が完了する	
		貞享3年	1686	大久保忠朝が藩主となる	
後期大久保時代		元禄16年	1703	元禄小田原地震により小田原城は天守を含むほとんどの施設が倒壊・消失する	
		宝永3年	1706	小田原城天守が再建される	
		宝永4年	1707	富士山が噴火（宝永噴火）	
		宝永5年	1708	前年の富士山噴火の被災地が幕領となる	
		享保元年	1716	享保の改革が始まる	
		延享4年	1747	幕領となっていた村々の大半が小田原藩に復帰する	
		天明7年	1787	寛政の改革が始まる	
		文化3年	1806	飯盛女設置	
		文化14年	1817	大火で小田原宿の80%が灰になる	
		文政2年	1819	大火で町屋が焼失	
		天保12年	1841	天保の改革が始まる	
	嘉永5年	1852	小田原の海岸に3台場が完成する		
	嘉永6年	1853	ペリーが浦賀に来航する		
	慶応4年／明治元年		戊辰戦争が始まり、明治新政府が成立する		
明治	明治3年	1870	小田原城の天守・櫓などが売却され、解体される		
	明治4年	1871	廃藩置県により小田原藩が廃止され、小田原県が設置される		
	明治23年	1890	小田原城跡が陸軍省より元藩主大久保氏に払い下げになる		
	明治29年	1896	人車鉄道が小田原一熱海館を結ぶ		
	明治34年	1901	小田原城内に御用邸が落成する		
	明治35年	1902	小田原大海嘯		
大正	大正9年	1920	東海道線小田原駅開業		
	大正12年	1923	関東大震災 天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落		



小田原城とその城下を描いた絵図としては最古。
小田原北条氏時代の面影を残す景観が描かれていると考えられています。

図1 小田原城最古の図 相州小田原古絵図
（「加藤図」部分。個人所蔵。）



幕府に提出した公式絵図。
寛永10年（1633）の普請工事後、元禄地震（1703）に被災する前の小田原城の姿が描かれています。

図2 相模國小田原城絵図
（「正保図」部分。国立公文書館所蔵。）



文久年間（1861～1864）に作成されたと考えられる絵図。
現在の町割りとの整合性も高い。小田原城周辺の遺跡は、この文久図と旧町名・地名に基づいて遺跡名称をつけています。

図3 「文久図」部分（小田原城天守閣所蔵。）

【もっと詳しく知りたい方のために（参考文献）】

- 小田原市教育委員会 2020『小田原城総構』小田原の遺跡探訪シリーズ 15
- 小田原市教育委員会 2023『小田原城とその城下 - 街道沿いの暮らし - 』小田原の遺跡探訪シリーズ 18
- 小田原市教育委員会 2024『小田原城三の丸』小田原の遺跡探訪シリーズ 19
- 小田原城天守閣 2014『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流～』小田原城天守閣特別展図録
- 小田原城天守閣 2016『小田原城天守閣 展示案内』常設展示図録
- 小田原城天守閣 2018『小田原開府五百年～北条氏綱から続くあゆみ～』小田原城天守閣特別展図録
- 宇佐美ミサ子 2005『宿場の日本史―街道に生きる』歴史文化ライブラリー198 吉川弘文館
- 福田敏一 2004『新橋駅発掘―考古学からみた近代―』雄山閣
- 佐々木健策 2019『戦国・江戸時代を支えた石 小田原の石切と生産遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」132 新泉社
- 佐々木健策 2024『戦国期小田原城の正体 「難攻不落」と呼ばれる理由』歴史文化ライブラリー 584 吉川弘文館
- 浅野春樹 2020『中世考古<やきもの>ガイドブック』新泉社
- 一般社団法人小田原市観光協会 2023『小田原北条氏百年の夢』

発掘された小田原城とその城下

—遺跡から探る地域の魅力とその活用—



お話に入る前に・・・

「小田原」＝「城」というイメージ。
だけど
実は、その他の時代にもマニアックで濃いトピックあり！

小田原最古？
の石器



羽根尾貝塚



中里遺跡



子持ち勾玉



千代寺院跡
(千代廃寺)

「小田原の遺跡調査隊」を知ってますか？

- 2020年から始動したプロジェクト
- 小田原市内の発掘調査速報をSNSで発信したり、出土品の展示などのイベントで専門用語をかみ砕いて説明してくれる、自称ご当地レンジャー(?)
- 現在、レッド隊長を筆頭に、ブルー・グリーン・バイオレット・ピンク・ホワイトが所属(他にレアキャラも?)
- 詳細は「小田原の遺跡調査隊」で検索🔍



今日の講座でめざすもの

- ・「小田原城とその城下」の魅力共有
- ・100年後の小田原城は？→みんなで考えるきっかけづくり
- ・実際に散策して、現代に残る歴史の痕跡を探してみしてほしい
- ・「小田原の遺跡調査隊」をフォローしてね！（親衛隊募集中）



前置きが長くてごめんなさい！
それでは、本題に入ります♪



上空からみた小田原市域



今日のおはなし

1. 戦国時代の小田原城とその城下

- ① 難攻不落の小田原城：とてつもない土木工事「総構」
- ② 発掘調査で見えてきた戦国時代の景観

2. 江戸時代の小田原城とその城下

- ③ 近世城郭として姿をかえる小田原城
- ④ 城下町・宿場町としての賑わい

3. その後の小田原城とその城下

- ⑤ そして近代へ

4. 活用の取り組み

この辺で休憩を入れたいなあ！



1. 戦国時代の小田原城とその城下

- 戦国大名**小田原北条氏**の拠点
- 「**難攻不落**」の堅城
- 小田原合戦で**豊臣秀吉**に敗れ、開城

小田原城はいつから？

実は、正確には
わかってない！



「**鎌倉時代**に後の小田原の西寄りの山上、小峯山に**土肥氏**が館を設けたのに始まると伝える」『**日本城郭辞典**』

☞ 『**新編相模国風土記稿**』の記述に基づいて、14世紀以前に「小田原城」の初現を位置づけ



発掘調査で14世紀以前にさかのぼる
中世の遺構はほとんど見つかっていない！
☞ **14世紀以前から小田原城が存在したことを示す要素は確認できない**



小田原城の初出事例（**康正二年（1456）**）

「**大森安楽齋**入道父子は竹の下より起て**小田原の城**をとり立、近郷押領」『**鎌倉大草紙**』 📍現在の静岡県小山町

☞ 考古学的に小田原城の築城時期を示す資料は未発見だが、

- **15世紀中葉以前**に「小田原の城」は存在。
- **大森氏**が取り立て、**北条氏**が関東統治の本城として発展。

北条五代の治世

※民の「禄寿（財産と命）、応に穏やかなるべし」

応 穏 禄 寿



虎朱印



北条氏が目指した理想の国づくりの姿勢を表したもの。約100年間、親子・兄弟が争うことなく、平和な治世を築いた。



初代 伊勢宗瑞 二代 北条氏綱 三代 北条氏康



四代 北条氏政 五代 北条氏直



北条五代各時期の最大領土 (小田原市観光協会2023『小田原北条氏百年の夢』より)

初代 宗瑞

堀越公方足利氏を滅ぼして韮山城を拠点とし、元亀元年(1501)までに小田原城入り。伊豆・相模ニカ国を平定。

二代 氏綱

小田原を本拠地として整備。武蔵国南部、下総国に進出。今川氏と対立して駿河国東部へ勢力を広げた。

三代 氏康

駿河国東部は失うが、扇谷上杉氏を滅ぼして武蔵国平定。隠居後、上杉謙信・武田信玄を小田原城で迎え討ち、南関東支配の基盤をつくった。

四代 氏政

上野国・下野国・常陸国へ勢力を広げ、織田信長に従属。

五代 氏直

北条領国最大に。甲斐国で徳川家康と激突、甲斐国・信濃国を放棄。小田原合戦へ。

2代氏綱により、小田原北条氏の本拠地として整備された小田原＝関東地方第一の都市へ

戦国都市 小田原の繁栄



「相州小田原の守護の政道私なく民を撫しかば、近国の人民恵みに懐つき移家、津々浦々の町人職人西国北国より群来、昔の鎌倉も争か是程あらんやと見る計に見へける…」『北条記』

清潔な市街と壮麗な城館

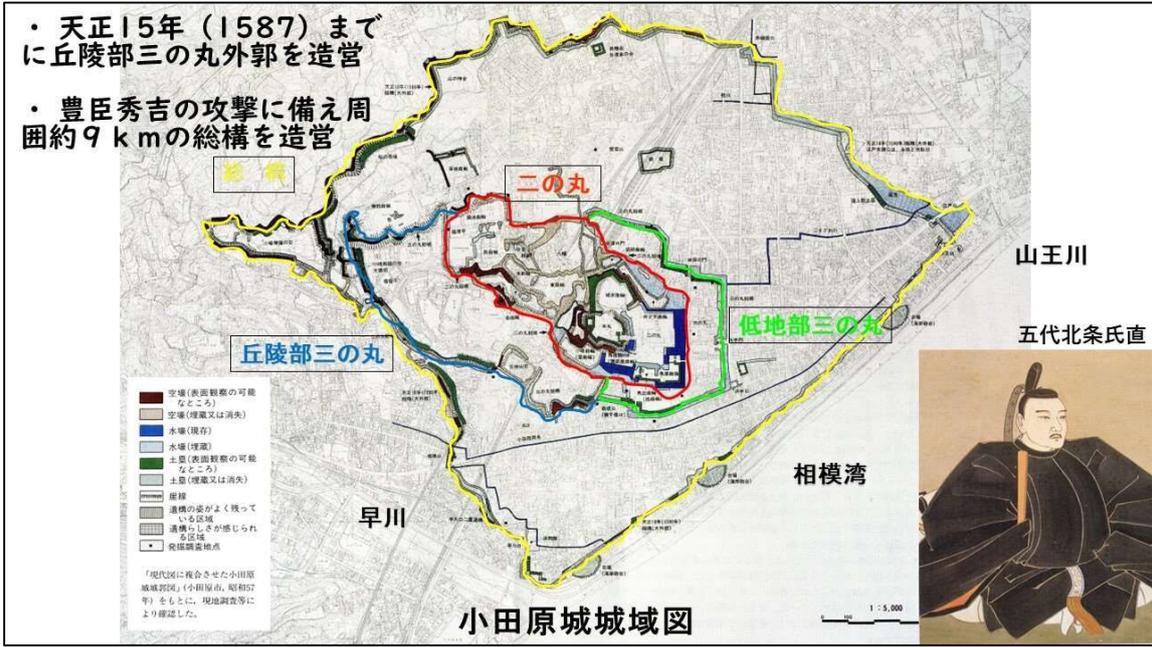
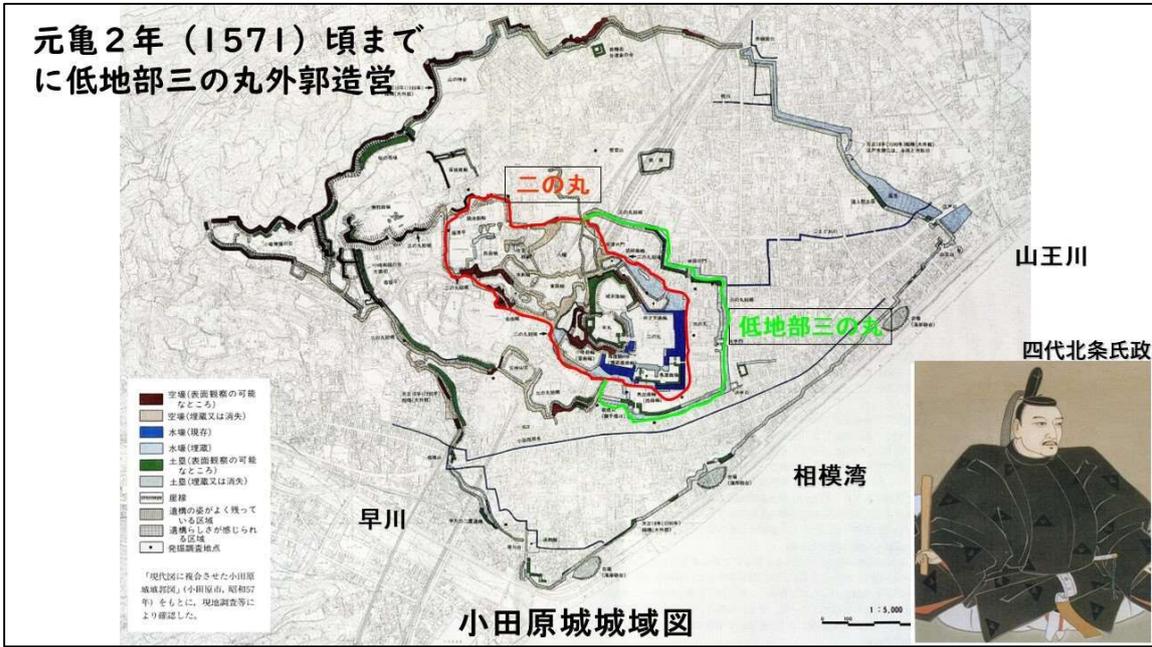
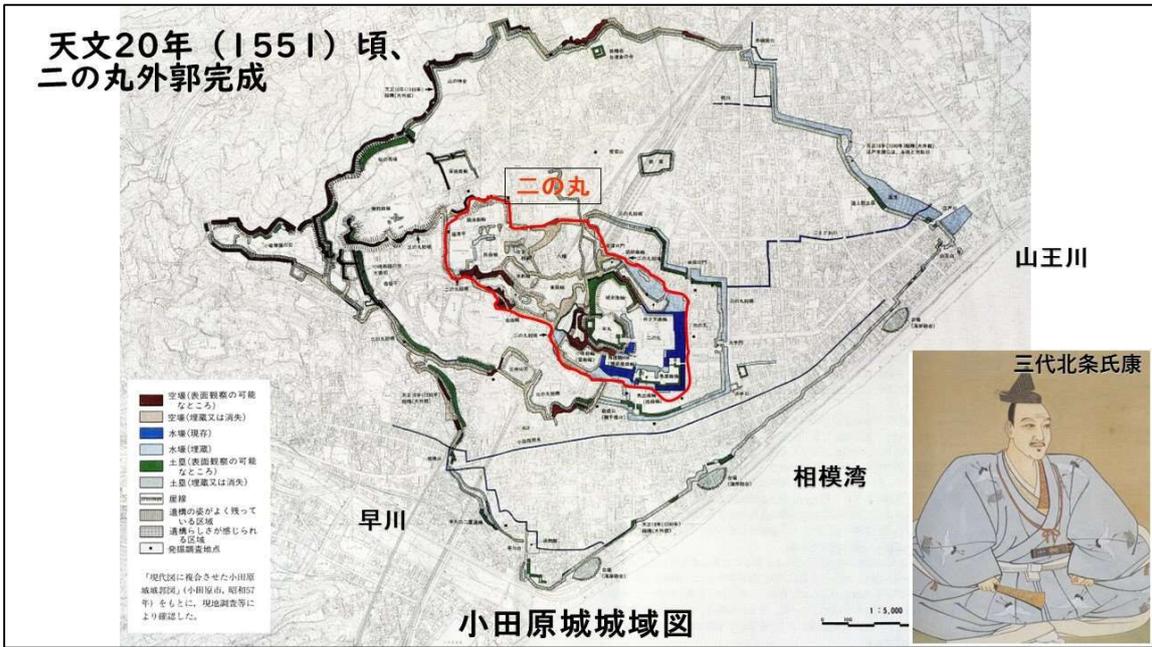
「至府中小田原、町小路数万間地無一塵、東南海也、海水遠小田原麓也、太守壘、喬木森々、高館巨麗、三方有大池焉、池水湛々、浅深不可量也、白鳥其他水鳥翼々然」『明叔録』



伊達政宗を驚嘆させた嚴重な備え



「小田原昨日残所ナク見物セラル、斯ル要害普請ノ体、言句ヲ絶シ玉フ箇様ノ要害、俵粮兵具ノ庫蔵際限ナク、何事ニモ不足無シテ」『貞山公治家記録』



① 難攻不落の小田原城：とてつもない土木工事「総構」



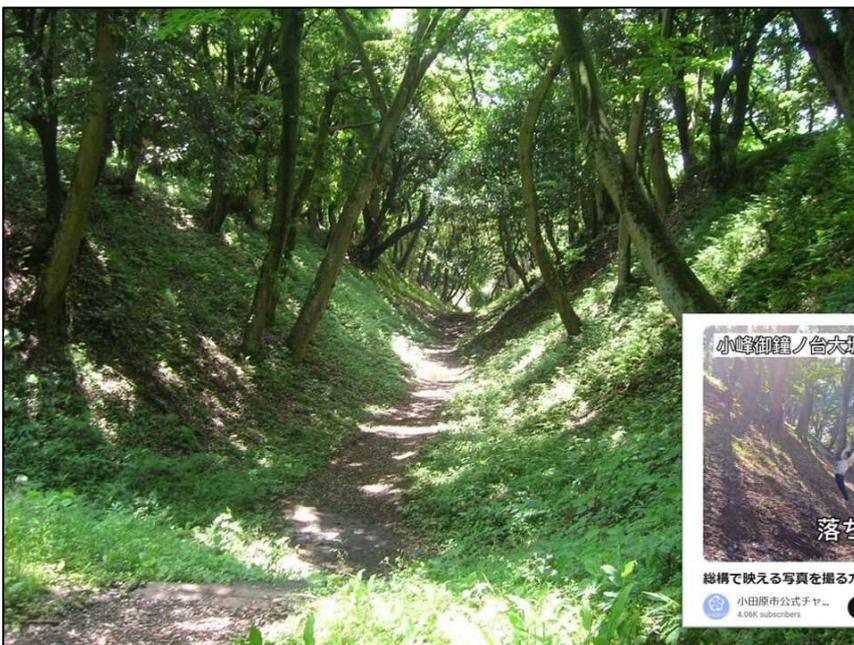
豊臣秀吉との緊張関係が生まれた天正15年（1587）の相府大普請などにより、堀と土塁で城下を囲んだ防衛ライン＝総構
※全長約9 km



戦国時代の小田原城のイメージ
(香川元太郎氏作成)



深いので、堀底まで発掘調査で到達するのは至難の業。安全に考慮しながら、土層断面の記録を進めていきます。



小峯御鐘ノ台大堀切

総構の堀底を散策できる！



総構で映える写真を撮る方法！【小峯御鐘ノ台大堀切東堀】

小田原市公式チャンネル
4,966 subscribers

Subscribe

3

Share

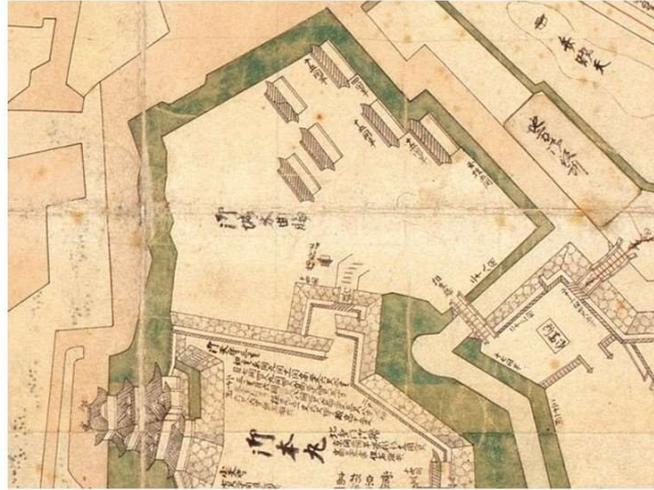
...

②発掘調査で見えてきた戦国時代の景観

二の丸

① 御用米曲輪第2～8次調査 (2010～16、23年)

- ・ 史跡整備に伴う調査
- ・ 礎石建物跡・池・石敷遺構・石敷井戸などを検出
→ 中世小田原城の中心的な施設が存在する空間か



文久図に描かれた御用米曲輪



石塔部材の二次利用
(五輪塔・宝篋印
塔・宝塔など)

御用米曲輪第2～5次調査五輪塔が敷き詰められた池



御用米曲輪
第8次調査
(R5.11.18
見学会開催)

- ・ 砂利敷遺構
- ・ 玉石敷遺構
- ・ 石組水路
など

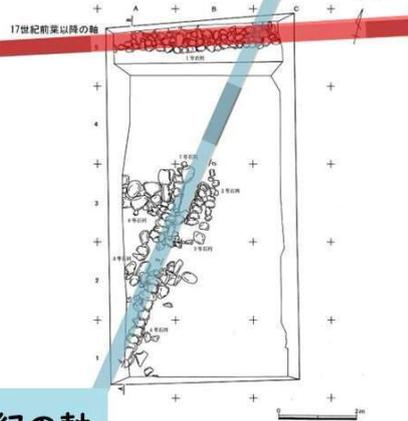
石組水路＝敷
地境や土地の
用途（庭、建
物範囲など）
の区画を反映

三の丸・城下の発掘調査



杉浦平太夫
・大久保弥六郎邸跡

17世紀前葉 以降の軸

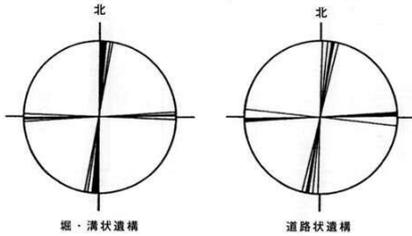


16世紀の軸

中宿町遺跡第II地点



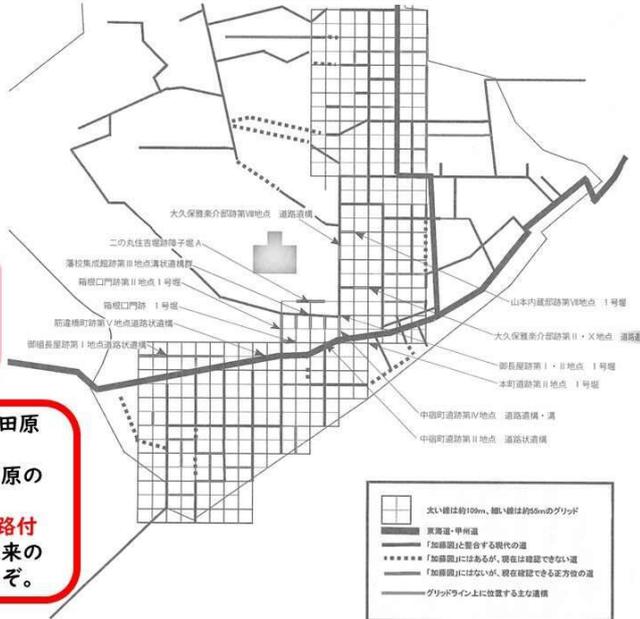
実は、これまでの発掘調査でみつかった堀や溝、道路などの方向を分析すると、戦国時代（16世紀代）のものほとんどが正方位の軸線であることがわかったんだ。



つまり、戦国時代の小田原には、**正方位の町割り**があったと考えることができるんだ。



それを、1633年の寛永小田原大地震を期に、改められたのが現在の小田原の町割りなんだ。
国道1号の南側（西海子小路付近）では、今も戦国時代以来の町割りの名残が確認できるぞ。



他にも、方形竪穴状遺構が集中してみつかるところもあるので、戦国時代の小田原の町には、一定の都市計画があったということが想定されるわ！





欄干橋町遺跡第VI地点で出土した様々な「やきもの」



小田原は、多くのモノが集まり、流通する集散地として栄えていたんだ。

戦国時代に戦国大名北条氏の本拠地、江戸時代に最大11万3千石の城下町、関東屈指の宿場町としても栄えた小田原には、各地から多くのモノが運ばれて来ました。



そして、たくさんの人に使われ、捨てられます。遺跡を調査すると、捨てられたたくさんの陶磁器が出土し、小田原での暮らしの様子を想像することができます。

2. 江戸時代の小田原城とその城下

- 譜代大名が歴代城主を務める、最大11万3000石の城下町
- 東海道の宿場町 = 箱根を控えた江戸の西を守る要地
- 富士山噴火や度重なる大地震などの災害と復興

③近世城郭として姿を変える小田原城

これまで見てきたように、戦国時代の小田原の城下町は京都のような賑わいでした。

そんな小田原も、1633年(寛永10年)の地震で大変な被害にあってしまいます。



通称「加藤図」





④城下町・宿場町としての賑わい



3. その後の小田原城とその城下

- 明治維新を迎え、小田原城は**廃城**
- 城跡は、**陸軍省**や**宮内省**の管轄を経て、**神奈川県・小田原市（町）**の所有地へ
- 現在は、**国指定史跡・都市公園**



完成間近の小田原駅 大正9年（1920）



汽車土瓶

鉄道の旅が始まると、弁当についてお茶を入れた汽車土瓶が登場した。大正11年にガラス製の容器に切り替わるまで、旅の供として親しまれた。

明治20年（1887）文明開化のシンボルである鉄道が横浜—国府津間に開業し、小田原の近代交通が幕を開けた。国府津駅は箱根や伊豆へ向かう人々のターミナルとなり、西湘の交通の要衝として注目を浴びた。国府津駅開業の翌年には、国府津—箱根湯本間に馬車鉄道、明治29年には熱海方面へ向かう人車鉄道が開業した。馬車鉄道、人車鉄道はその後、電気鉄道、軽便鉄道へと変更された。



👉 天守台再建後に一時設置された、こども遊園地の観覧車

戦後、市民の間で天守閣の石垣を積み直す「天守閣石一積運動」が起こり石垣が再建されたのに続き、市制施行20周年の記念事業として天守閣の再建が決定した。昭和35年（1960）、小田原城天守閣は完成。



👉 象のうめこ



復元された馬出門と銅門



天守閣・常盤木門の復興を経て、昭和57年（1982）から本格的な史跡整備が開始。史跡整備は、発掘や文献史料などの調査を踏まえて進められている。平成9年（1997）に銅門、平成21年（2009）に馬出門の整備が行われ、江戸時代の小田原城の姿がよみがえりつつあります。



4. 活用の取り組み

- ①行政主体の活用
- ②民間主体の活用
- ③他県等での取り組み



①行政主体の活用



おだわらデジタルミュージアム
Odawara Digital Museum

<https://odawara-digital-museum.jp/>
(2023年3月31日～公開)

厳選！小田原市の収蔵資料

学芸員が厳選した小田原市の収蔵資料を、特別コンテンツのジャンルやテーマごとにご覧いただけます。

特別コンテンツ



高精細写真

資料を拡大して細部まで見ることができます



3D・ObjectVR

資料をぐるっと3DやObjectVRで楽しめるコンテンツです



VRツアー

小田原市内の歴史的な建物をVRツアー（バーチャルリアリティ）で見学できます

テーマ



中里遺跡



北条五代



小田原城

TOP



まち歩きアプリ「小田原さんぽ」

- ・ARやVRコンテンツ
- ・観光情報
- ・デジタルスタンプラリー

② 民間主体の活用

大外郭の会主催 小田原城総構を一周しよう!!

小田原城総構は天正18年(1590)、天下統一を目指した豊臣秀吉の小田原攻めの際に、豊臣氏が小田原の町全体を守るために築いた全長約10kmに及ぶ防衛ラインです。豊臣軍は約15万の大軍を持って小田原城を包囲し、最終的には約100日にわたる攻めも、島本・北条元就の援けによるもので、開城ではなく開城でした。歴史的にも重要な総構(堀)と土塁の一体を堪能して下さい。

日時：令和6年5月4日(土) 少雨 開催行先中止
 時間：9:00出発～17:00ごろ終了
 集合場所：小田原駅西口北家早稲公園前※事前申込後、当日ご集合ください。
 ※参加費の全額を、お城の整備に活用させていただきます。

◆AVX受付：0465-24-0254 ◆メール受付：odawara046@gmail.com
 お申し込みは当日までお取りの連絡が無い場合、参加費の返金にお断りください。
 ◆お昼飯：「信長・信玄・信長」(昼飯) ◆お土産：5月1日(日)まで ◆費用：1,000円(当日受付時に現金です)。◆持ち物：飲み物、筆記用具等
 ※参加費は早稲公園での自由献金(持ち物も同様) 大外郭の会 主催 小田原市教育委員会 大外郭の会事務局 〒256-0816 静岡県小田原市北町2-15-36
 TEL:0469-47-0534 ※電話でのお申し込みは受付していません。



NPO法人「小田原まちづくり応援団」
 ・2012～22年まで清閑亭の運営



NPO法人「みんなでお城をつくる会」
 ・小田原城天守木造化プロジェクト



一般社団法人「小田原市観光協会」
 ・各種イベントの開催等

③ 他県等での取り組み



おかしあそび考古学者 ヤミラさん
<http://r.goope.jp/yamiramira/>
 土器片クッキー「どっきー」





OOUCHI GOZEN
大内御膳
～足利将軍をもてなした中世最大級の饗応料理～



日本全国の、
「歴史のストーリーを有した、価値ある食」を、
私たちは「歴史食」(れきしよく)と定義しました。

<https://reki-shoku.jp/>



將軍御成御膳の
文献から再現 **大内御膳**

山口県山口市

1500（明応9）年、室町幕府の第十代将軍だった足利義植を、山口の大内義興は中世最大の宴でもてなしました。

大内御膳は、その献立記録にみられる料理を忠実に再現。当時なかった砂糖・醤油・みりんなどは一切使わず、500年前に武将達が食した味を体験して頂ける御膳に。



国宝火焔型土器縄文雪炎
クッションカバー
¥5,500



国宝王冠型土器ランチバ
ッグ
¥3,410



古の多様な装飾性を楽し
む縄文土器ソックス
¥1,870



国宝火焔型土器縄文雪炎
スタッキングスープマグ
¥2,420



広重おじさんトランプ東海
道五十三次



光を受け神秘的にきらめく
モルフイオイヤクセサリー
¥2,310



CFを絵画のように楽しむ
ミュージアムA4ファイル
¥4,180



ギリシャ神話のハルモニア
&カドモスの蛇リング
¥4,950



フェリシモミュージアム部

<https://www.felissimo.co.jp/>

FELISSIMO

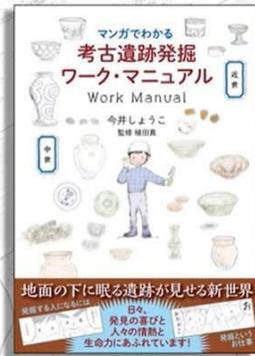
Copyright© FELISSIMO All Rights Reserved.

通信販売の企業。
くらしの中で博物館・美術
館を楽しめるグッズを考
案・販売しています。



大阪府高槻市
安満遺跡
(国指定史跡)
弥生時代の大集落

<https://www.ta-katsuki-kankou.org/ama-site-park/>

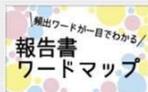
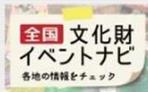


創元社

マンガでわかる 考古遺跡発掘 ワーク・マニュアル Work Manual

今井しょうこ 著 / 植田 真 監修
定価1,540円 (税込)

今井しょうこさん
『マンガでわかる考古遺跡発掘ワーク・マニュアル』
『マンガでめぐる考古遺跡・博物館』



全国遺跡報告総覧

Comprehensive Database of Archaeological Site Reports in Japan

奈良文化財研究所
Nara National Research Institute for Cultural Properties

全文データを
検索可能!

WEBで発掘調査報告書を読める

全国遺跡報告総覧

Comprehensive Database of Archaeological Site Reports in Japan

キーワードから探す

検索

- 詳細検索
- 道跡(抄録)検索
- 全国文化財イベントナビ
- 詳細検索

道跡報告総覧連携

- 127 全国文化財目録の公開
- 829 報告書種別を細分化しました
- 10/18 全国文化財情報デジタルツインプラットフォームの構築
- 1/31 資料の整次およびシリーズ番号にて一括置換
- 1/30 NCIDとJP番号の一括登録

日本地図からさがす

English | 日本語

→ トップページへ戻る

全国遺跡報告総覧

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

まとめ

- ・ 戦国時代～近代まで、様々なトピックで語れる
「小田原城とその城下」
- ・ 遺跡をはじめとした文化財の活用は、自治体や専門家だけでは不十分。
- ・ **みなさんのアイデアが…!**
- ・ **ぜひ、小田原城とその城下を散策してみてくださいね。**

